図像文学の世界(その一)：一遍聖絵のホームレス資料

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 昭五 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1374

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

図像文学の世界（その一）

――一遍聖絵のホームレス資料――

渡邊昭五

一、はじめに

世界に共通して、いずこの国の文学文芸を鑑みても、その国の宰相や宗祖高僧の伝記や伝説や、その事蹟のことは誇張化されて語り尽されているが、庶民の最底辺層にうごめいていた乞食やホームレスなど、あるいは古典文学時代に軽視されていた大道芸人とか放浪漂泊民的技能者や売春婦の消息は、詳しくは語られない。

それは、今日の文芸やその他の記録の類においても同じである。

三十年も経れば、昭和三・四〇年（一九五五～六五）ごろに、いつも銀座の数寄屋橋のたもとに坐していた、銀ブラ族にはお馴染の懐しい顔などは忘れ去られてしまったであろう。いやいや、昭和二〇年代（一九四五～五四）の敗戦後の上野公園に、飢えて死線を彷徨していた欠食の家無し放浪者や、焼出されて親を喪った孤児の、何と多かったことか。「食」に困っての売春婦（もちろん雇い主など不在の自主的営業の素人が多く、彼女らを含めてこの一群の「立君」をパンパンガールと俗称していた）が、新宿の伊勢丹のかどから、代々木駅までの明治通りの両側の歩道に、ぎっしりと絶え間なく、約一キロの距離を続い

ていた記憶が、私にはある。しかし、これらの習俗の低徊も、当時の少年だった私の鮮烈な印象だけであって、この事象を陳述した記録は一般的には見たことがない。それどころか、東京山手環状線の駅の、真暗闇で乗降客も殆どなかった「大崎」を除いては、改札口を出て乗降客のすれ違う場所から少し離れたところに、凡ての駅周辺に二、三名のパンパンがいつも客引きをしていた。おぼろげな少年期の記憶では、昭和三〇年（一九五五）ぐらいまで続いた現象であったようだ。昭和二一年の年の暮近く（敗戦から一年以上も経ていたのに）引揚げて来た私は、上野駅地下道にぎっしり焼け出されて家を失った人がゴロ寝をしていて歩く隙間もなかったことを、覚えている。戦時中から、この頃まで銀シャリ（まざりもののない純粋の白米飯）の口にすることのできなかった昭和二〇年代（一九四五～五四）の約十年間のお咄である。

印刷物の多い今日の近代社会の、情報過多と云われている時代にして、記録の残らない実情は、斯くの如くである。明治以前の、出版物の何万分の一ぐらいしかなかった古典文学の世界では、もっともっと貧しかった日本人のはずであった。……が、この類の底辺習俗のことは、殆ど詳述されていない。

戦記物でも似たようなもので、一将の功は語られても万骨たる底辺のいくさびとのことは、軍勢という「群」でしか語られない。米を収奪する施政者のことは、讃めたゝえられ語られても、労力を出しつくして生産する多くの貧農の生死を堵した重労働のことは語られない。

それらは凡て一把一からげの習俗や民俗として幾世代に積み重ねられる何十万人、何百万人の聚落や村単位の人々のマスとしての性格で、伝えられ語られるにすぎない。

その点で、語られ（記され）ない文学として、カットの一隅に描かれた図像としての、彼ら雑民の性格を鑑みることも、古典研究や歴史資料の新しい重要な作業だ…と私は思っている。

※

文学で記されていない図像（を含めた多くの絵）、説明のない図像、説明があっても説明以外の絵かきの意志が感じられる

図像、などなど、絵の語る文学性を絵の裏側から読みとろうとする研究が、故岡見正雄たちによって始められて、十年ぐらいを経て、昭和五〇年（一九七五）ごろ、伝承文学研究会の内部において研究会活動が始まった。徳田和夫の提唱した研究法であった。

絵画史や美術史家には、殆ど認められていない絵である。その凡ては泥絵具を用いての、一紙半銭の浄財を投げる庶民参詣者を募るための宗教的宣伝のための絵画であって、長谷川等伯「松林図」とか円山応挙とか池大雅とか、有名人の筆による名画というべきものでもない。いわば、今日でいうなれば、写真のスナップ的な掃いて捨てられてしまう当代の風俗が、その描かれた中心主題の脇の点景として、絵画の隅っこの方に、発見されるのである。

例えば、十三世紀のホームレスの資料などという類は、調べようとしても、そんな事象を書き遺してくれるような物好きな人間はいなかった。乞食や大道芸人・流浪人・贋坊主・放浪職人たち、あるいは河川敷に専住していた売春婦などといった風俗は、わずかに近世随筆に二、三行ぐらい記される文献が、幾千の出典の中に一パーセントぐらいしか見あたらないのだが、高僧絵伝などの状景には、中心の主人公の僧の行動を描写する背景の中に点じられて見られる図像などがある。一遍上人の一代記を描いた『一遍聖絵』には、主人公の一遍を除いた「空也上人遺跡市屋道場」の図の左末端の東堀川の河川敷に、この時代の多くのホームレスの微妙な表情をうかがい知ることができるのである（図11参照　後述五七ページ――伝承文学研究第46号の表紙解説参照）。

今日でも、新聞雑誌や多くの文芸小説などの記録に残らない状景がある。如何に情報が多くても、あまりにも日常茶飯事的な普遍性の富んだ事象…、例えば、朝食の味噌汁を人々は何杯ぐらいお代りしていたか…とか、汁の具に豆腐は何片ぐらい入っていたか…とか、早朝に散策する人は都市居住者の何パーセントぐらいだったか…とか、飼われている犬は雑犬の嗜好がどれくらいだったか、犬の種類の嗜好とか、愛玩動物に何が何種類ぐらいの割合で存在していたか…とか、小学校の運動会の三等の賞品はどの程度の品物があったのか…とか、数えあげればキリはない。放浪性の濃いホームレスに

近い押し売りの恫喝性・強情性や、彼らが高級住宅地をめぐってくる割合、押し売りの具（ゴム紐とか暦とか…）など、その服装や帰ってゆくアジトの所在地など、記録には一切残らない類であろう。

スナップ写真の片隅に偶然に遺った史料があったとすれば、それは室町絵画のたまたま描いた数少ない民家の表情に共通しての、偶然の資料ということになる。

そして、この種の研究は、故川口久雄などの提唱もあって、最近において始められた。昭和五五年（一九八〇）に西尾光一をトップに、林雅彦・徳田和夫による絵解き研究会が発足して、文部省科学研究助成金をいただいて、近江の湖東三山を始めとする研究調査も行なってきた。あれやこれや、約あの時から三十年弱が矢の如くに過ぎ去ってしまった。私も、弘法大師掛幅絵伝を始めとして、珍しい一遍や真教の掛幅絵伝の新発見など（富山新聞―平成10・8・25参照）を経て、新資料をカラー版に印刷化しての、原物が喪失されても、史料に残る努力をしてきたつもりでいる（大妻女子大研究紀要第31号）。

本稿では、それらの掛幅絵を含めての新資料ではなく、主に絵巻物として知られた有名作品（例えば中公絵巻大成・角川絵巻物全集などに所収の類）から、当代の今日に知られざる風俗（まず本稿ではホームレス）の種々相を、鑑みてみたい…と、思う。

二、一遍聖絵のホームレスの画像

他の図像には見られない、上述の珍しいとされるホームレスの画証を『一遍聖絵』から拾い出してみる。一代の遊行僧（ゆぎょう）であった一遍智真（一二三九～八九）の生涯を記した『一遍聖絵』（一遍上人絵伝とも…）には、その一生の殆どの時間を乞食同様の春秋に過した一代記が描かれている。

ホームレスか、もしくはそれに近いと思われる彼ら乞食たちの生態が、このように数多く十七ヶ所も、一遍の一代記に描かれるのは、どうしてであろうか。他の絵巻類には描かれなかった底辺庶民の姿態は、今日となれば貴重である。それ

は、絵巻を描いた法眼円伊か、もしくは詞書の聖戒（弟子の一人）が、彼らのむくつけき姿に、一遍に共通する聖者性の胎生する性向を見たのかもしれない。聖者性を具備する修行僧の相貌は、よろしくホームレスの如きむくつけき気質がなければならないと感じたのかもしれぬ。

板を束ねた仮屋根をぐるぐる巻きにして、これを携帯しながら、あちこちの宿を定めかねて、施禄の多い寺社の境内や参詣路ばかりをめぐり歩く彼らには、全国の聖蹟を訪い続けて歩く一遍にも似た小型聖人の性格を、円伊や聖戒は考えていたのかもしれない。

その理由は推察より出ないのであるが、まずは『――聖絵』の十七ヶ所の画像を逐次、図像とともに鑑みてみることにする。

※

（1）巻一……肥前国の**華台上人住居の門前**の小柴垣の外の往還

巻頭の一遍の生家に続く、十五歳の少年の一遍が、華台上人を訪れる場面である（『中公絵巻大成』の一〇ページ…以下大成と省略…**図1**参照）。華台上人の広い庭先を隔てて、小柴垣の柵の外に、上人住居とは比較にならない薄汚くて狭い民家が十三、四戸ほど往還を挟んで並んでいる。その中の一戸に修行中の僧らしい坊主頭の男が薪割りをしている。その隣の民家の入口あたりで、蓬髪髭面の物乞いらしい男が、椀を左手にして、背を向けて坐している。所持する行器や蓬髪の人相は、以後に描かれる非人乞食に共通する生態である。托鉢に廻国

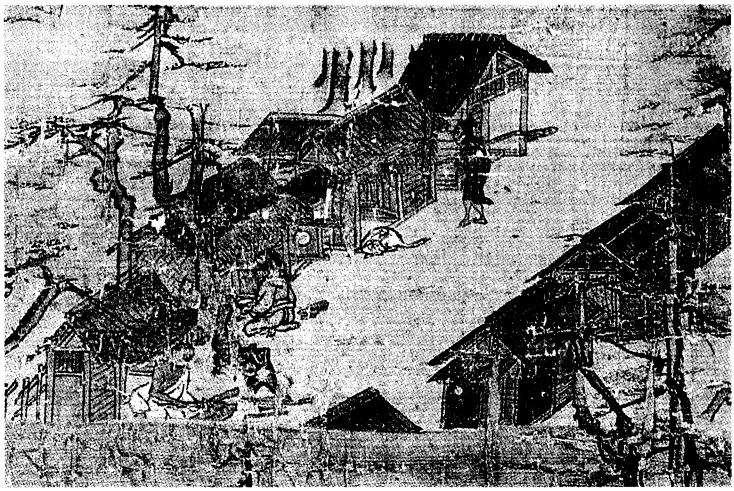

図1

修行する僧が、いつしか修行中の放浪性を身につけてしまって、流浪する自由放奔な気侭さが、気に入った姿にみえる。施禄のみで、気がねも気遣いも不要な人間関係のわずらわしさが、男に修行も立身出世も捨てさせたということかもしれない。華台上人の住居らしい小さな寺に来るのも、かつての修行の場をふりかえっての懐古趣味からかもしれない（その上部に鋤を担って野良から帰宅しようとしている男がいる。上人の膨大な土地を借りての小作人であろうか。足もとにうづくまる犬とともに貧農の侘しさが浮き出ている）。

（2）巻二……大阪の**天王寺の西門の左側築地**の外塀

外塀の往還の路傍の両側に、七・八戸ずつの通りを挟んでの小さな粗末な、大人一人がやっと寝れるほどの小屋が、むかいあって並んでいる（『大成』五一ページ…**図2**参照）。直径三〇センチほどの樹木を輪ぎりにしただけの車輪を付けた小屋が、それらの仮小屋の中に三戸ばかし見えるのは、歩けなくなったいざり（恐らくハンセン病の罹災者とみる。この種の歩行不可能となった躄の男は、異常に多かった中近世である）が、あちこちの寺社の祭礼日の施禄をあてにして、移動していた何よりの証左である。ホームレスは、向い側の小屋の前に、四人ほどみえて寝ころんだり、立て膝で坐っている。犬もいる。その犬が見ている前で一本の棒を立てて膝をからませているのは、十字形の棒に乗って一本足で立つ曲芸である。この仮小屋から寺社の縁日などに出張して行って、その大道芸で生活費を稼ぎだしていた見世物

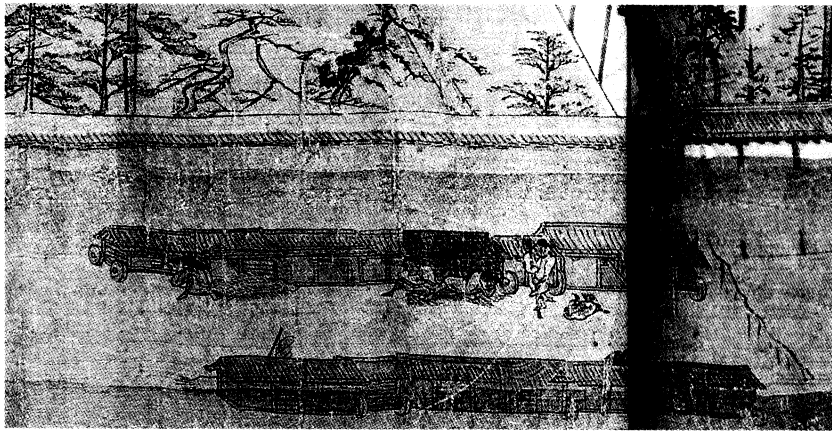

図2

芸人らしく、そのリハーサルといったところである。この十字形棒一本足立ちの曲芸は、中国から伝来して日本の散楽芸として、あるいは『信西古楽図』などにいう「透梯」に該当する曲芸と思われ（『芸能文化史辞典―中世編』の「たかあし」の条・平3・名著出版）この種の一本足で立つ曲芸が、曲芸師のポピュラーな芸能と化していたことが理解される。手前の小屋の左から二戸目の男は、蓆の屋根の雨洩りの隙間を修繕している、といった感じである。

天王寺周辺というのは、今日の大阪の四天王寺の地域であって、その土地背景には釜ヶ崎という安宿のドヤ街を控えている。かつての豊臣秀吉が比叡山々麓の坂本周辺に住居を持っていた石垣築城の職人を、信長の在命中の安土城の築城のために湖東に移転させ、さらに信長没後の大阪城築城に際して、秀吉が難波に移した者たちである。彼らは、その後の大阪という巨大な商業都市の発展のために、中央部から都市に入ってくる商人たちの手で、都市の外郭へ外郭へ…と押し出されて、遂に天王寺周辺の地域に釜ヶ崎という特別な地帯をかもし出すようになった。したがって、今日でも天王寺公園やその周辺にはホームレスが多い。四天王寺の境内の内外ともに、必ず施禄をあおぐ彼らの姿を見ることができるが、彼らの姿もかつての貧困な時代の昭和三〇年（一九五五）前後の以前とは異なって、着している衣服などは、一般の参詣客とあまり変らない立派なものになっている。換言すれば、非人乞食の用語に意味する中近世の彼らとは異なって、廿世紀後半の流浪人は、むしろ怠け者の、サラリーマン稼業を嫌悪した臨時のホームレスが多くなった、ということではあるまいか…。

（3）巻二……大阪の**天王寺の西門外の西鳥居外塀のかど**

天王寺外塀の（2）の図に続く、さらに寺域の外部に近い、同じ往還から約二〇メートルほど隔った通りに、もう一つの二戸の車輪つきの乞食小屋が並んでいる。（**図3**参照）。恐らく、天王寺周辺にやっとの思いでたどり着いた手こぎ車の仮小屋であったが、先住

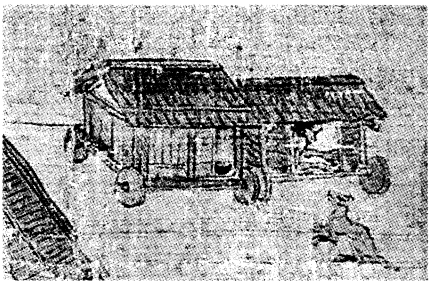

図3

の（2）のグループの仲間には入れて貰えずに、施禄の通行人も通らない西鳥居近くのコーナにとりあえず滞ったのであろう。その二つの仮小屋を遮るようにして、T字形の通路に乞食小屋横丁に背を向けての物売りらしい小屋が並び、通路をさえぎってしまっているのも、彼ら乞食が無視されていたか…を伝える、情況を無言のうちに語ってくれているように思われる（**図4**）。

この二戸の仮小屋の左手の方には、彼らの必需品である行器（ほかい）（椀）が入口に置かれて、人は見えないが、その小屋に向って白い犬がちんちんの芸をしていることで、内部の人が想像できる。ホームレスの小屋には、いつも犬が描かれている。…と云うのも、彼ら乞食は一般人より遥かに孤独で淋しかったのであろう。一人の無聊（ぶりょう）と、わずらわしい人間関係を避けたい二つの葛藤を、このようになついてくる野良犬を可愛がることで、慰めたか…。一遍没後の一三〇〇年ごろの京は、南北朝争乱の改変の直前で、洛中洛外ともに荒れはてていた。飼い主で生活に困り始めた者も多かったはずで、飼い犬も随分と野良犬化していたことであった…と推察される。

（4）巻二……同じく天王寺の**西門鳥居のすぐ左脇**

上述の（2）（3）の図に同じ場面の、西門の鳥居のたもと（玉垣の外側）のすぐ傍には、小屋のないホームレスが二人並んで、通行人の施禄を頼りに、それぞれの椀を膝の前に置いて、莫座（藁であろう）の上に坐している（大成五二ページ……**図4**参照）。右の男は鳥居を通過してゆく、武士や旅商人らの男たちに大声をあげて呼びかけ叫んでいるように見える。小銭すら施さないで、権力ばかり振りかざしている成りあがりの武士の後姿に向って、非難の罵声を浴びせているような雰囲気も感じる。けたたましくも騒がしいホームレスの性格を、無声の場面から感じとれる。小屋がないのは、恐らく通行人の少ない（2）（3）の仮小屋から、往来のもっとも多い鳥居の脇に出張してきているからであろう。

天王寺西門には、一遍没後以前一五〇年ほどを遡った保元の乱（一一五六）前後の頃に、念仏信仰の抬頭期にあたっての西門念仏信仰の興隆した時代があった。仏舎利信仰が結びついて西門周辺には遊行の無名聖が集まっての、迎講・往生

講の結縁の雰囲気を以て、私度僧による念仏所が建てられ、鳥羽院などもこの仲間に入るという大衆念仏信仰の興隆の場となった聖域であった（小論「中世絵解き文芸の胎動と浄土教」・就実語文2号・昭36）。前関白忠実や鳥羽院の参詣も、五年間に六度にも及んでいたし、忠実の子の頼長の日記『台記』には、絵解きに関しての天王寺西門詣での記事が六度も登場している。この六条の記録を再び抄出してみると、一遍生存時代を一世紀以上も遡った西門の浄土往生信仰の憧憬と現実の差は、いさゝか開きが大きくなっていたのではないのか。夢と実際の世との感覚の隔差に観想の支梧背馳が人々の心に侵蝕しはじめていた…と考えられる。『台記』の六条には、

（ア）康治二年（一一四三）十月廿二日

……北政所、先参二御畫堂一、畫堂八本作畫坐、恐非、……本寺権上座某、持レ楚指レ畫説レ之、余依レ仰昇二座上一、有二不審一之時問レ之、北政所、乍二車引立一聴聞之一、良久説了、……次北政所、参二御聖霊堂一、乍車引立、凡北政所、参御講座之時、侍男共引之、……余昇二堂上一、奉レ礼二聖霊一二度、用拝太子之礼、仍不三拝、祈請云、若摂二録天下一之時、願任二十

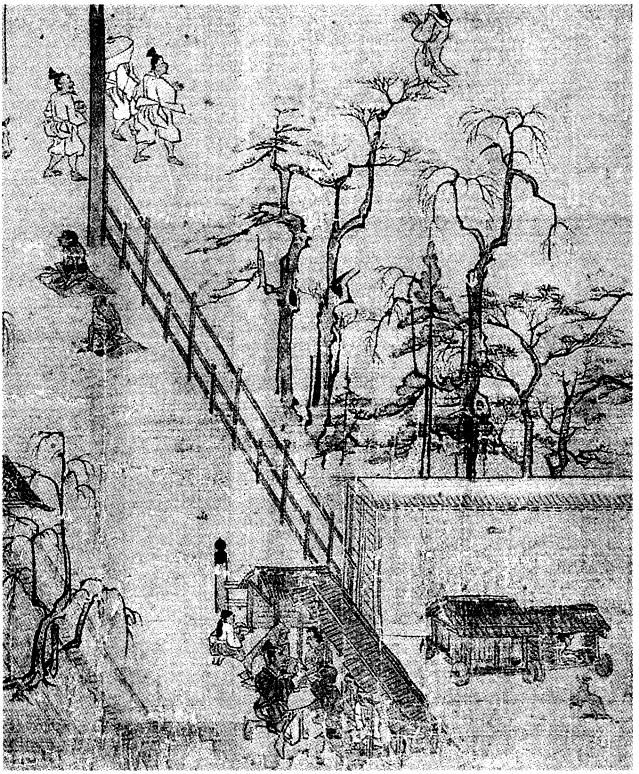

図4

七条憲法一行レ之、此心無レ変、令二天下揆乱反正一矣……

（イ）久安二年（一一四六）九月十四日

……説了退出、賜二禄於説絵僧一、次幸二西門一、入道後従、御二覧聖人行迎一、……次参一御聖霊院一、……次御二覧絵一、此間通憲入道応レ召執一申雑事一、昨日依召下向云々、次御一覧甲斐黒駒影一、次於二申絵堂一令レ説レ絵、入道祇候、申二聖徳伝伝八本作太子事一、

（ウ）久安三年（一一四七）九月一四日

……幸二聖霊院一、令レ説レ絵、奉レ見二太子影一、及レ暗幸二念佛所一、行法了、……

（エ）久安四年（一一四八）五月十二日

……覧二甲斐黒駒影一、向二絵堂一、令レ説レ之、依レ仰、其説委二曲於常一、賜レ禄如レ常……

（オ）久安四年（一一四八）九月廿日

巳四刻参二行在所一、依二講説未一レ始詣二聖霊院一、午四刻聞二講説始一帰参……賜二故中納言匡房所作之続往生伝一、即読レ之及二過半一、詔曰退下早帰来、今日参二聖霊院一欲レ令レ説レ絵、先即置二往生伝於御前一、退下干時未四刻、先之例時訖、須臾帰参、申二刻幸二聖霊院一、先礼二霊像一、次御二絵堂一令二僧説一レ絵、干レ時余與二信西一侍二左右一、僧有二謬誤一、改正、僧有二闕偏一、補綴、説訖賜レ禄、次覧二黒駒影一、次幸二念佛所一……

（カ）久安六年（一一五〇）九月十七日

……講後両院詣二聖霊院一、先礼二木主一次移二絵堂一、令レ僧説レ之　了女院皈二行在所一、上移二御西鳥居外一、……

……

とある。西門の両側の参詣路には、念仏所がしつらえられていて、その小屋の内部には常に百万遍念仏を修する数十人単位の番衆が念仏を唱えていたらしい。『台記』には鳥羽院の言葉として、久安四年（一一四八）九月廿一日の記事に、〈……

朕ハ中旬ノ番衆タリ、明日ハ番ニアラズ…〉と記しているから、貴賤を問わず上は法皇や天皇から下は百姓農民や行商人までを含めて、十日ごとの番衆が組織され、年間三十六旬に分けての念仏誦経が行われていた、と井上光貞『日本浄土教成立史の研究』（昭31・山川出版）に論証され、その希望者の数は、一千人を超えていたろう…と云われる。これらを指導した人々が、これまた顕密体制から疎外されていた私度僧たる遊行聖たちであったのだから、世の中も変れば変ったものとなった。まさに、乞食非人の群れにも等しい襤褸をまとった放浪僧の、緇素の区別もつかないホームレス的な遊行僧なども、数えきれないほどに、この西門周辺に集まってきたことと、推測される。この流浪する僧群の一団が、天王寺西門に乞食非人の群れを集める環境の伝統をかもしだす端緒をつくり、今日に到る延々八〇〇年以上の時の流れの中に、釜ヶ崎周辺の安宿街を中心とした独特の雰囲気を、培ってきたのか…と、私は想像している。

『台記』の記事では、僧の楚で説く『聖徳太子絵伝』の掛幅画の図像文学の解説を、観聴聞している鳥羽院や忠実や頼長の姿が、他の集まってきた他の信者とともにあることが想像される。しかし、これらの超最高貴族が、果して一般の被差別出身のホームレス的遊行僧たちと、ともに観聴聞していたとは思われない。やはり、特別室がしつらえられていたのであろう。しかし、十日間の念仏所たる西門ほとりの仮小屋では、一般の遊行僧のまじる番衆としての念仏をやらなければならない。身分の差なく、遊行僧たちとともにたむろして、念仏は行われていたであろう…と、想像される。それは、念仏の目的である浄土往生信仰が根底にあるから、番衆の身分の差別は、さほどに無いほどに同じ仮小屋で行われたはずである。別の棟とするならば、日没に際しての西門ほとりの念仏所での誦経中にその西方の水平線に沈みゆく太陽の一瞬の、西方浄土が見えなかったであろうから…である。西門の日没を拝する信仰は、平安中期ごろに遡って存在していたらしく、はるばると京から淀川を伝ってこの河口の雑草の生い繁る湿地帯をわたって（まだ大阪という都市はない）はるばると貴顕が参詣に来ている。その最高貴族が、鳥羽院であるが、『栄花物語』巻三十一には、長元四年（一〇三一）九月廿八日に上東門院彰子が参詣に訪れている。上述論文「中世絵解き文芸の胎動と浄土教」（昭36）の一部をそのまま、引用しておくと、

……岸のまにまに並みたてる松も、千年までかかる事を波風静かに吹き伝へ奉らなんと覚ゆ。酉の時ばかりに、天王寺の西の大門に御車とゞめて、波の際なきに西陽の入りゆく折しも、拝ませ給。何の契にか残りてと、めでたくこそ。次に御経供養せさせ給。教円僧郡講師仕うまつりけり……。

（『栄花物語』巻卅一）

とある行啓は長元四年（一〇三一）九月廿八日のことで、この前後から藤原頼通・赤染衛門などの公家貴族の西門から眺める難波の海の日没を来迎と観ずる思想が、流行しはじめるのである。西門は、極楽の東門と考えられ、赤染衛門は〈ここにして光を待たん極楽に向ふと聞きし門に来にけり〉と詠んでいる。『梁塵秘抄』一七六、『今昔物語集』巻十一の廿一、にも記されるほか、四天王寺の入水往生では『拾遺往生伝』下四の沙門永快、『後拾遺往生伝』下五の行範上人、『続古事談』第四末の誓言、流布本『発心集』第三の卅一のある女房などがある。

このような西門観想念仏信仰が熱狂じみてくる、はしりとも云うべき世の風潮と、「往生伝」の流行にのっとって、これに迎合する浄土往生の図を太子絵の事象の一齣に載せなければならない、当代の天王寺信仰である。高級僧による天王寺の絵解きが、他の往生説教講と並んで、浄土往生の説話を入れなかったとは、考えにくい。太子絵に絵解き僧が、それを触れないで済ますことは、太子信仰を以て西門念仏に来る聴者の方が許さなかったろう。そして、十三世紀再建の絵殿太子絵が、この構図を踏襲したかは不明だが、再補別当慈円によって構想された九品往生図の西面に描かれたのは、既に当代の往生思想が、天台浄土教に考える華やかな死と太子絵伝の浄土往生の構図では相容れない様相にあったからであろう。太子絵では納得できない、当代の阿弥陀来迎による往生観が昂ぶっていたからであろう。

それは、平安末期から鎌倉初期にかけての仏教思想の革命期に、次々と表われた来迎図の変容に、その物語的構成が示されるからである。

と記す。当時の人々は四天王寺西門から拡っていた渺茫たる海に沈む、赤いまぶしい光と波を見た。そのまぶしさに目をくらませ、古く古代民俗の常世の国の幸福感の遺伝していることを無意識の中に感じたであろう。私の二十二年前の論文

であるが、四半世紀弱も歳月を経て鑑みるに、まるで他人の論文のような感じさえする。二十二年間、私は西門にも御無沙汰している。

引用が長くなって、ホームレス資料の紹介が西門信仰中心になりすぎた。本稿を再び『一遍聖絵』の画証に戻ることにしたい。

（5）巻四……**因幡堂薬師**＝平等寺（京都の高辻通の南、烏丸通の東）

堂の縁の下の地べたに、蓆にくるまって白河夜船の二人のホームレスがいる（――大成一〇三ページ…**図5**参照）。枕もとにはそれぞれの行器らしい椀があって、その奥の方に煮炊きをするらしい釜か土鍋のような容器がある。釜のように見えるが、鉄製の釜は異常に高価であった時代であるから、土器とみるべきであろう。『一遍聖絵』本文には、弘安二年（一二七九）の春とあるから、まだまだ寒い早春の頃である。ホームレス二人は、足の方を暖めあうように、それぞれ逆さまに、一つの菰を被って眠っているのが、いたましい。その縁の上の廊下では堂僧が、泊る一遍のための畳を運び込んでいるから、時間はまだまだ宵の口である。…が、その下のホームレスは熟睡しきっている。彼らは寝ることしか用はないかのように眠っている。栄養も碌に摂れない時代の、一般民以下のホームレスならば、栄養失調ですぐに眠くなる。敗戦直後の昭和二〇年代（一九四五～）から十年ぐらいの間は、日本全国に居眠りの人ばかりがいたことなど、当時の通勤路線の山手環状線の車中の記憶が思いあわされる。縁つづきの反対の階の向う側の縁下には、犬の母子が眠っている。野良犬も多かったであろうが、神社などではこれらの犬も比較的に積極性を以て保護していたのかもしれない。

そして、その犬の縁の、斜め上のコーナーにも、蓆を掛けて寝ている乞食がいる（**図6**）。こ

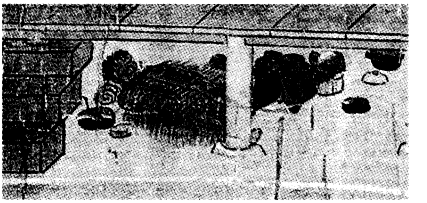

図5

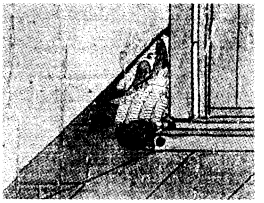

図6

ちらは縁の上だから、寺僧に般若湯でも恵まれての白河夜船かもしれない。床上に寝るホームレスと床下のそれの差違は、寺に対しての労働をしたかしないか…の待遇の差別だろうか。しかし、中世の語り物には床下でのお籠りによる再生のモチーフは多い。

床下に参籠したがために、急転直下その主人公の運命が拓けた良俗を語った語り物は、中世の『一遍聖絵』以降に急速に多く散見されるようになる。吉兆を得るとか、人生が変わるとした信仰が、庶民信仰の拡がりとともに中世以降に寺社がその浄財を得るために積極的に宣伝に用いたのであるまいか。少し、主旨からはずれるが、この良俗が記された中世の語りの世界、そしてその庶民の俗信の拡大性を一覧してみておくことも徒らではあるまい。多くの先学の指摘するところで（岩崎武夫『さんせう太夫考』・昭和48――服部幸雄「宿神論」・文学・昭和30 1月――高取正男「民俗と芸能」・『日本芸能史』第1巻所収・昭36――小田雄三「後戸考1上」・名古屋大教養部紀要29・昭60などなど）、屋上屋を架す論考となるが、敢てその語りの拡がりによる、寺社の一紙半銭の徴募の宣伝性を考えてみよう。

説経『しんとく丸』の主人公の俊徳丸は、癩を病み盲目となって、四天王寺の念仏堂に捨てられる。彼は、乞食として熊野に向うが、途中に許婚の乙姫の館に寄り物乞いをして、下女の嘲りを受けただけであった。彼は熊野詣を断念して四天王寺に引き返す。

天王寺ぢせん堂に、縁の下へ取り入りて干死せんとおぼしめす…

とある一文に、当代の寺社境内に食う物もなくて餓死者が相当の数がいたであろうことを推察させている。寺社で逝けば、極楽の西方浄土か、常世の永久の世に生き返れるという再生復活の念願を、縁の下の参籠の良俗は、託していたのやもしれぬ。下女の話を聞いた乙姫は、彼を捜し求める。四天王寺は乙姫が、彼に見染められた場でもあった。乙姫は四天王寺に向ってゆくが、見付けることができずに蓮池に身投げしようとまで覚悟をきめる。……が、

待て、しばし我が心。尋ね残いた堂のあり。「いせん堂」を尋ねんと、「いせん堂」にお参りあって、鰐口ちやうど打

ち鳴らし、「願はくは夫のしんとく丸に尋ね会はせて給はれ」と、深く祈請をなさるれば、「後ろ堂」より弱りたる声音にて、「旅の道者か地下人か、花殻たべ」とお請ひある。乙姫この由きこしめし、縁より下に跳んで降り、「後ろ堂」にまはり、蓑と笠を奪ひ取り、差しうつむいて見給へば、しんとく丸にておはします

この邂逅において、語りは急に転換をして、俊徳丸は病も回復して、乙姫との婚姻を遂げて再び長者となり、ハッピーエンドということになる。この幸運をもたらした契機は、四天王寺西門外にあった引声堂の背面の「後ろ堂」の縁の下のお籠りであった。

もう一つ、お伽草子『うばかは』にも三夜の堂の縁下のお籠りにおいて、主人公の長者の姫君が急転回を以て幸運を得るという語りが伝承されている。『うばかは』は『岩屋の草子』『鉢かづき』『花世の姫』に同じ傾向を具える継子いじめの話である。尾張国の岩倉の里の長者の姫が、継母にいじめられ、家出して徘徊して、甚目寺の観音堂にたどり着く。

母上のましますところへ、いそきゆかはやと、おぼしめし、内陣のゑんのしたに、人にしのひてこもり給ふ

とある。「内陣の縁の下」という意味が、如何なる場所か寺院の建物か、よくわからないが、堂の外縁の下ではなく、堂の内部の家の中に入っての床下であろうか。何れにしても、この観音堂に三夜その床下か、縁の下に籠ることにおいて、観音菩薩が枕上に立って、「近江国の武士」を尋ねて行きなさい、と示唆を与えてくれる。行く旅の途中の美しき姫君の身を守るためにそれを着用すると醜く見える「うばかは」を授けられる。

さても、ありかたき、御つけかなと、ふしおかみ給ひ、てんあけゝれは、うはかはを着給ひて、ゑんの下を出て給ふ

とある。姫君は観音菩薩のお告げのままに、近江の佐々木民部たかきよの邸にたどり着き、その門前で読経をし、その子息のたかよしに姥皮を着する事情を語って、夫婦の契りを結ぶ。いわゆるシンデレラ型の類型性を具えた物語である。しかし、甚目寺観音堂と近江などの関係が、今日の研究では繋っていない。阿弥陀信仰万能の全盛時代の平安末・中世初期を通過して、浄土教信仰は阿弥陀如来の隷属下ともいうべき観音信仰に移る中世中末期となるのだが（阿弥陀信仰は阿弥号を

名のる被差別芸能人クラスにおいて安売りされすぎたための衰退してしまう）。この語りは観音信仰の全盛期の中世中末期ごろの伝承であろう。しかし、中世末期には床下参籠習俗は、もはや形骸化していた。岩崎武夫は上述書において、俊徳丸のその床下参籠の良俗について、〈…この縁の下、盲目という闇を連想するイメージが、次に訪れるしんとく丸の蘇生と浄化を意味する光明の世界にとっては不可欠の忌み籠りの状態を暗示している。世間との繋がりを断って、干死（ひじに）（餓死）まで覚悟した絶望的なしんとく丸の闇の世界は、遂に蘇生と復活を待ち受けている忌み籠りを意味しており、それは仮死と苦痛を伴うイニシェーション（成年式）であったといえよう…〉と論述している。成年式が復活再生の意義を具えた年中行事であったことは、日本民俗において、少年が青年に、少女が成女となる折り目として、山入りお籠りの民俗事例を始めとして多くの類例が伝承されていたことを、私も以前に『歌垣の研究』（昭56・三弥井書店）に述べてきたことであった。この床下参籠の習俗にも、かつては男女が共寝をする歌垣的機会（男女共寝による共感呪術の信仰）も存在していたであろうことを、私は推察し確信している。

（6）巻四……信濃国佐久郡の伴野の市

市といっても閑散としているのは、定期的な市が開かれている時代の、市がたっていない時であるからであろう。草葺きの柱だけの小屋に一遍が坐し、随従の僧たち十五、六名が一遍に向きあって坐している中で、一人だけ一遍の前に進んで対座している。叡山から後を追ってきた重豪である。一遍は説教を語っ

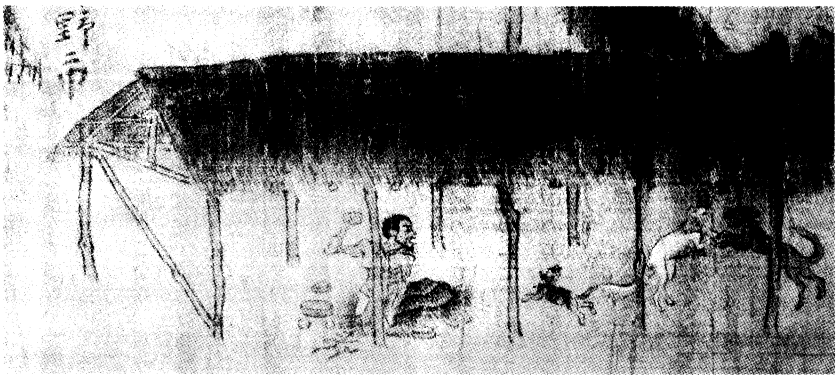

図7

ている様子である。そのグループのずっと後ろの方に、七人のホームレスが離れて一遍の方を見ている（大成一一〇ページ）。あるいは遠く空に出た五色の瑞雲を仰ぎ眺めているのかもしれない。七人の乞食は下半身は、霞に隠されて描かれていないが、半数の相貌には無精髭が生え、二人は蓆を担い、一人は白布で面を蔽っている。癩者であろう。彼らはおずおずと一遍の一行に近づきたそうにも見える。放浪僧にあやかって、彼ら流浪乞食も、一遍の一行に従っていけば、いつしか遊行僧になれるかもしれぬ、と念じているのかもしれない。

その一遍の小屋から広い道（の如き広場）を挟んで（図では一遍一行の真上に当る）の草葺きの細長い小屋に、一夜の仮の宿りをしていたらしいホームレスが、目覚めたばかりの風情を示すように、敷いた蓆の上で体をぼりぼりと掻いている（大成一一〇ページ…**図7**）。彼ら乞食ばかりでなく遊行僧たる一遍たちでも、蚤や虱は多かったことであろう。たゞ、彼ら遊行僧は庶民から清浄感を以て描写されているから、こんな乞食の体を掻くような描写は、当代の絵にも文にもない。同じ草葺き小屋の上下に、ホームレスと一遍一行を対照させるように描いているのも、遊行僧の修行抖擻（とそう）の厳しさとふしだらな生活の流浪人とを比べて語らせようとしているのかもしれない。体を掻く流人の傍には、三匹の犬がじゃれあっている。その小屋の端には鴉が群れていて、如何にも閑散な市を表現している。一遍上人の背後には、西方の空を見上げる六人の一般人が叫んでいる。〈…同年（弘安二年―一二七九）八月……信濃国佐久郡伴野の市庭（いちば）の在家にして、歳末の別時のとき、紫雲はじめてたち侍りけり…〉と本文にあるから、西の空に瑞雲が上った驚きの表情を描いたものである。放牧された牛が遠くに見えることも、閑散さと侘しさを誘う。

（7）巻四……**鎌倉の町なかの光景**

執権北条時宗との邂逅の鎌倉の大通り（八幡宮の通りであろう）を進んでゆく一遍の一行を不審に思ったのか、時宗は扇を差し出して、馬上から呼びとめている。一遍の一行の後方では、小舎人に追いたてられて逃げようとしているホームレス五人が描かれている（大成一四一ページ―**図8**参照）。小舎人の振う鞭に懇願するようにこれを制する半裸の黒髪の痩せた乞食は、

あわてて腰に提げた行器を路傍に落している。逃げまどってころんでいる全裸に近い男は、どす黒く描かれている。肌の黒ずんで見えるのも、ハンセン病のせいではあるまいか。大切な寝具の蓆も中の一人の誰かの所有物なのであるが、これも落ちて道に散乱している。貴人がお出ましになる場所には、常に前以てこの種の非人乞食の類は、追い払われていたのであろう。小舎人に追われて逃げる五人の、その前方には、別の放浪者の群れらしい六人の男が逃げて行く（**図8**参照―大成一四二ページ）。都合で追いたてられているのは十一人であるが、前方を逃げるグループの方は、少し五人の方よりは服装などは整っているような感じもする。ホームレスではなく旅人のようにも見えるが、旅人が逃げるのはおかしい。白覆面をしているのが、二人も存在しているし、手入れも殆どしていないといった風の蓬髪髭面の何も持たない男もいるから、やはり非人乞食の同類とみる。これらの十一人と、一般人に比して数の多い彼らであるから、恐らく鶴岡八幡宮周辺にたむろして、参詣者の善意による施禄をあてにして、周辺に起居していた連中であろう。貴人の参詣などの折には、常にこのようにまとめて追い払われるホームレスたちなど、見るからに汚穢（おわい）色の濃い階級は、後進性の濃い国ほど多いし、その処遇も人並みに扱われない場合が多い。しかし、彼らは性懲りもなく、寺社境内周辺に舞い戻ってくる。施禄を仰ぐのにもっとも収入の多い場であったし、一般の施す側の人たちも、他の地域ではやりすごしていても、寺社への参詣の折には善意を以て施すことで、神仏の加護が自分にも報いられてくる、とした善根報載の信念信仰があった。

次に、ホームレス資料とはニュアンスを異にするが、本図の鎌倉の町なかの点景の左

図8

端の方に、鎌倉の市街を通過して郊外の山中に野宿する一遍一行の食事の場が、描かれている。遊行僧たちは、このような群の場合はもちろん、一人旅の場合でも泊まる資金や泊めてくれる善根の人がいない時には、常に着のみ着のまゝのこのような野宿が通常であった。だから、体なども臭気にみちて、今日からは想像できないほどの不潔汚濁性があったと思うが、遊行僧を始めとして当時の緇人に対する記録の表現は、非常に清らかで芳香の漂う描写となっている。野宿の食事の内容も、いたって粗末なもので、各人一椀だけでお菜が見えない。〈…よりて、その夜は山のそば、みちのほとりにて、念仏したまひけるに、鎌倉中の道俗雲集して、ひろく供養を述べたてまつりけり〉と本文にはあるが、図像の方では、鍋などが煮えてる様子は見えるが、粗末なものである。当時の寺を持てなかった俄か僧を含めて、せいぜい御馳走のある機会に恵まれたといっても、遊行僧の食生活はこんな程度である。一般民の食物の施物があったとしても（ない無名僧も多かったろう）、非人乞食に類似している点は多い。

（8）巻六の第一段（錯簡）……**鎌倉片瀬の館**

弘安五年（一二八二）に、鎌倉入りを拒絶された一遍一行の片瀬の館の御堂での断食行の最中に、上総の生阿弥陀仏が訪ねてくる場面である。その手前の左下方に非人の小屋を描く。（大成一六三ページ……**図9**参照）。御堂の右手に遠く海岸線に近い葦原を遠望する景と向きあって、十一戸の小屋がある（本図はその左隣の浜の地蔵堂の境内に続くようにも構図されている）。向って右端の小屋には、餓死したらしい死体の色が変っている乞食が横たわり、小屋の上を鴉が五羽ほど群れている。人間の屍体を啄むために鴉などが群れ集まっ

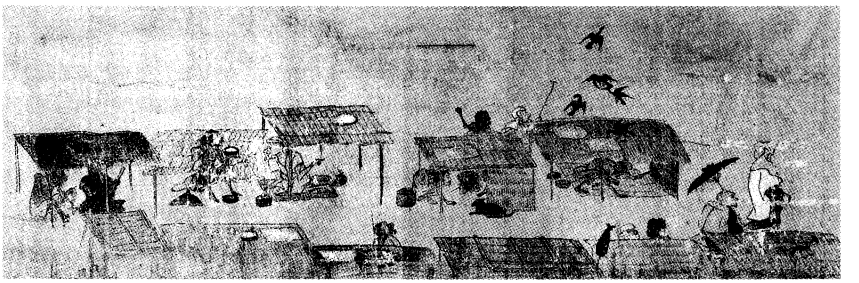

図9

てくるような中世社会であった。その隣が煮炊きをしている二人の乞食（母子か…）、こ、にも黒犬が傍に忠実に控えていて、野良犬でも可愛がられるのか、よくなついているようにみえる。その左隣が右の小屋を指さして、その左隣の乞食に話しかけている。「気の毒に、とうとう逝っちまったヨ」といったところか。それともすぐ右隣の煮物の煮える匂いに、「また、あいつ等は拾ってきた野菜屑を煮ているヨ…」とでも云いた気である。二人の間に子供がいるから、話しかけられた食べている乞食は多分女性であって、彼女から生まれた子であろう。右足もとに市女笠があるのが、女性であるらしいことを思わせる。そのさらに左隣の右端の小屋では、二人の男が小刀で細工をしている様子である。竹細工や笊籠などの製品は、西日本各地では被差別聚落の特産品というところが多く（米が穫れない土地のために、細工に精出する故もあろう）、近世ではこの竹製品で釈迦涅槃像とか、酒顛童子や関羽とか、ギヤマン和蘭陀船とか、牛・馬・鶏・鶴・亀・孔雀などの人形を製って、見世物興行に出したり、売ったりした記録が暁鐘成の随筆『雲錦随筆』やその他の記録に散見されるが、それらの売人も、この種の被差別出身の農民であったと、想像されることである。

向いの五戸に向いあった乞食小屋の六戸は、屋根だけで人物は後ろからの描写で見えない。右から二戸目の小屋前に、白覆面と蓬髪髭面の男の二人が向きあって会話をしている。その前の乞食小屋の通路を通りすぎてきたらしい僧が小僧を伴って、一遍の小屋の方に向っている。餓死者を見舞った功徳の僧かもしれない。そうでなくて、こんな乞食小屋の向きあう狭い路次を通過してゆくのも、何となく妙である。四戸目の小屋の前には一人の乞食が、餓死者の小屋の方を振りかえっている。屋根に破れ傘が拡げて干してある。振りかえった坊主頭のそれは、明日の我が身を案じているのかもしれない。それとも、路次を去ってゆく功徳僧をうらめし気に見送ったものであったか。それでも緇素良俗の集まる一遍の小屋の人々は一切無関心といった十一戸の乞食小屋である。

一方、この十一戸の小屋を挟んで画面左端には、浜の地蔵堂が拓かれ、一遍の踊念仏が始まっている。板屋の高舞台には鉦鼓をうちならすけたたましい騒音が伝わってきて、通行中の貴人の駕籠を始めとして老若男女は殆どがその舞台を見

上げ、合掌する緇素男女が見えるのであるが、乞食小屋の連中は冷ややかに誰一人としてこの踊念仏にも関心を示していない。無信仰の彼らには、同僚の餓死者の噂の方がよほど関心事であるように見える。鎌倉の片瀬の館と、浜の地蔵堂との、横長の構図の真ん中に十一戸の乞食小屋を配して彼らの無関心を示した絵は、作者の意図しなかったところとはいっても、当代のホームレスの表情をよく示唆しているように、私には感じられる。考えすぎであろうが……。

（9）巻七……**関寺の門前**（関寺の外塀を出て右側）

近江と伊勢の国境の山脈の中にある関寺は、中世の往還の境界で当代では交通の要衝として盛んであった。寺の出てすぐ左脇の門前道路の脇に、八戸ばかりの板束や藁蓆を屋根にしつらえた乞食小屋が並ぶ（大成一七九ページ……**図10**参照）。門前の小川の流れと外塀の間が、往還の道幅であるが、その三分の二ぐらいを八戸の小屋の並ぶ二列の幅が占領して、米俵を積んで通行する牛車や馬の方が遠慮をして、その狭い道を行くように見える。向きあう小屋には、塀側にそって（子供を含めて）六人の非人、道路中央にこの塀に向って五戸六人の非人が見えている。塀側の六人のうち、門を出てすぐ外塀の右脇のところに、顔面を白布で巻いた二人の乞食がいる。一人が半裸で一人が着衣姿であるから、男女伴れの夫婦とみえる。その並びの塀の右隣では三人の乞食が鼎（かなえ）を囲んで食事をしている。一人の男が箸と椀を持ち蓆を膝の上にかけ

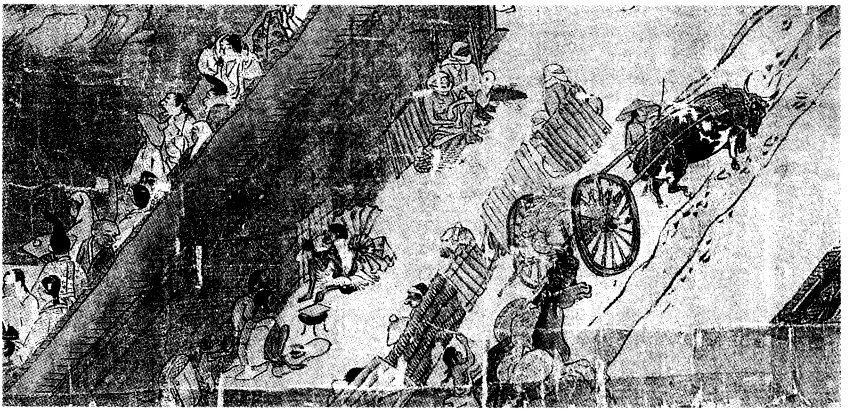

図10

ての、何やら談義をまくしたてているようである。この談義を聴いている二人の後ろに少年に近くなっている子供が坊主頭の腰にすがりつこうとして、何かをねだっているように見える。二人は夫婦で、少年はその二人の間に生まれた子供であろう。夫婦だとすれば、女性の方も坊主頭で黒髪も薄いように灰色がかっている様子である。毛髪が薄いか、抜けか、っているとすれば、これも梅毒か癩に罹っての夫婦ずれということになる。談義をしている椀を持つ男の敷かれた束は破れ傘か。鼎の鍋も、手に持つ椀も白いものが見えて、白飯か麦飯か…を食していて、向きあった車座相手の二人の夫婦はそれが羨しいように、眺めて少し食べさせてくれ、と云っているようにも見える。二人の夫婦と一人の子は飢えていて、これをうらめしそうに凝視しているのならば、彼ら非人乞食にも、施禄の多寡によっての、ささやかな上下関係もできてゆくことになる。談義する椀を食する乞食は破れ傘を拡げ背にして、板束も塀に立てかけて、乞食の中でも裕福そうにも見える。

この五人に向きあって一列に道路中央に並ぶ板束仮屋根の五戸で六、七人の非人は、背越しで首から上しか見えないが、やはり白い面縛の乞食が四人も見えている。その殆どが、癩などの病気の軽い段階にあることを、画証は無言で語り伝えている。五戸の中で二人伴れらしい夫婦が二組四人も見えている。夫婦で、お互いに癩か梅毒に感染してしまって、再起不能となって社会疎外者と化してゆく当代の政治の貧弱さを察することができるのである。

(10) 巻七……空也上人遺跡市屋道場

一遍の踊念仏の興行される舞台造りの板屋が描かれる図の左端に十一戸ほどの非人乞食の見える小屋らしい住居が見える（大成一九六～七ページ……**図11**参照）。東堀川の西の河川敷で、今日の西本願寺・竜谷大学・興正寺などの一帯の東寄りあたりである。広い河川敷を取り囲むようにしての貧しい非人小屋を、右上端から逐次ぐるりと観察してみる。まず、右上の小屋の外側にいる全裸同然の男の二人は、躄（いざり）である。二人の手には足駄が穿かれていて、一人の男の両膝の下と、別の男の尻の下には敷物が敷かれている。前者は前向きに両膝を地面にこすりながら前進するための膝の皮膚の予防であり、後

者は尻をこすって進むための予防である。二人の様子は尻の方がすり寄ってきた感じの蓬髪後ろ姿であり、膝の方が坊主頭で前にこごんで耳を傾けている。土車という中世の車椅子ともいうべき木輪のついた台に載って移動した中世の語り物、例えば説経節『小栗判官』の餓鬼阿弥（違例者）の姿などと同じであって、彼ら被差別の乞食たちは参加できなかったが、一般人でも躄は多かった。近世になっても、この姿で土車に乗って西国三十三所の観音霊場を訪れる躄は多かったに違いない。多くの物語があり、特に被差別人の多かった時衆文芸の作品に見られている。信仰で躄も立ち上って歩けるようになるとした信念が、数多くの作品を生んでいる（小著『中世史の民衆唱導文芸』一一六～七ページ・平7）。次に、裸の男の二人の隣に並ぶ上の三軒並んでの小屋…。中央にざんぎり頭の母乞食が、物を食べている。膝もとに嬰児らしいのが、その食物をねだっているが、素知らぬ顔である。右側の才槌頭の乞食が「子供にも少しぐらい食べさせたらどうじゃ…うるさくてかなわん」と云ってでもいるような按配である。左隣には、すねたように昼寝をする蓬髪の非人。前に並べた二つの矩形は躄のための足駄か。栄養失調になると居眠りや寝る時間の多くなるの

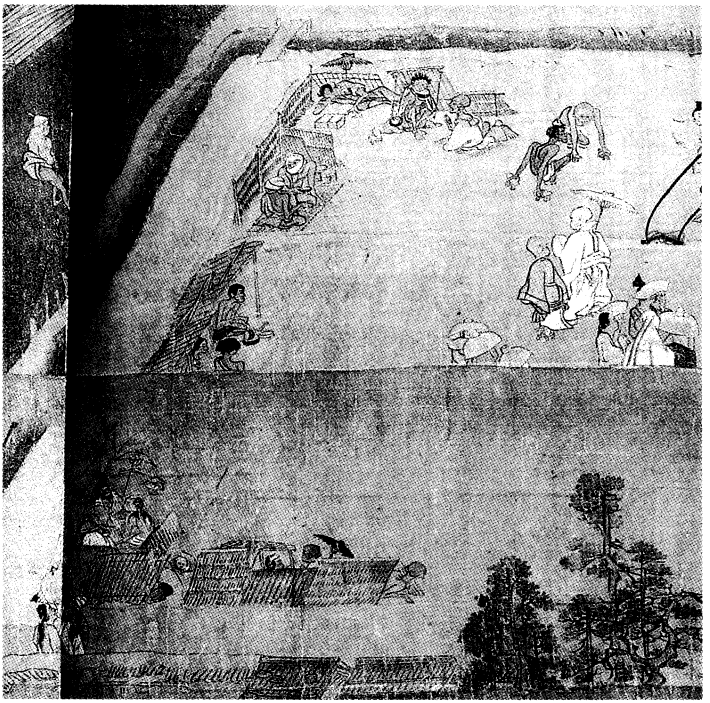

図11

は、私たち世代の育ちざかりの頃の、終戦（昭和二〇年―一九四五）を挟んでの前後十五年ほど続いた、芋ばかりの主食の食糧難時代を思い起させる。当時は、山手線に乗っても居眠りをしている人が、五、六割は存在していた。河川敷の角隅をまわって、その下の向きあった二人の白布面縛の男もハンセン病である。この病は、長い潜伏期間の後に症状が表われ、天刑病と云われるほどに不治の病とされた。そのために、近代に入ってもこの患者は生涯隔離の悲惨な境遇を強いられたほどで、中世ではこの病状が表われると、血縁親族から切り離されて、家や村を離れて流浪生活をしなければならなかった。古代から中近世にかけて喧しく云われた触穢の観念や、前世の因が現世の果をもたらす因果応報の古代仏教の遺伝的体質をそのまゝ伝承する中世社会では、不具者や疾病者はすべて非人とされて、犯罪者とされた。穢れは不浄であり、罪であり、前科者であって、差別されなければならなかった。仏法でいう凡ゆる「失」は「罪」であり、前世で犯した不品行不行状の報いであった。『今昔物語集』巻二〇の三五にいう〈白癩という病つきて、親と契れりし乳母も穢れなむとて寄らしめず…〉とあるように、周囲の凡ての親しいものから縁を絶たれて、流されてゆく。ハンセン病の患者は、こうして同病相憐れむ如くに、同質者を以ていざり寄り、河川敷などの非人のたむろする解放された自由な場で、善人たちの施禄によって細々と生きなければならなかった。河原の小屋に目を転じると、さらにその下の庇つきの小屋には、三人の裸同然の者がいる。上の痩せ細った男は、空のお椀を叩いて、わめきたてている。その視線の正面（図の右端中央―二人の躄男の下）に傘をさして歩む小僧伴れの高僧がみえる。彼に向って、わめく男は「一銭も貰えねぇのかよぉー、ドケチ坊主め…」とすねているか、そんな小銭を要求している姿である。高僧の方は、ハンセン病に向って歩く様子である。河原を訪ねる僧や遊行聖も少なくなかった。この高僧も救済活動に乗り出そうとしているところか。ハンセン病救済に業績を残した僧も多く、古代末期では律宗の西大寺流の僧たちである。叡尊や忍性の活動を始めとして、彼らは僧を仲介として非人長吏に引きとられ、不治の病のままに、非人宿で余生の短かいまゝ、終焉を迎える。病者を救うには仏法の慈悲しかなかった。ハンセン病は生活レベルが向上すると罹病率は、激減する。昨今の日本人の生活では殆ど罹らないという。昭和末期の一

九八〇年ごろで年間二〇名ほどの罹病者の数と聞いた。終戦直後（一九四五～）で一千名ぐらいだったとか。その点からも、中世初中期の一般民の生活レベルの貧しさが、推して知られよう。何万人何十万人のハンセン病罹病者がいたことか…。その三人の乞食のうちの、下の小屋の上半身だけ見える二人は、女乞食らしく一人は片肌をぬいで、素肌をのぞかせている。もちろん、売春も当然行なっていたであろうし、売春まがいのストリップ大道芸も稼ぎの有力な手段であったろう。ホームレスに女が少ない、というのも彼女らは根底から飢えることはない。立君としての売春ホームレスには老婦が多かったのも、そんな商品の条件に拠る。

霞を隔て、さらにその右下隅の囲いには三人の乞食が向きあって話している。そのかざしている傘の柄に、掛軸らしい巻物が結びつけられている。この傘の柄の巻物を結びつけた法師の図は、他に『一遍聖絵』に三ヶ所ほど出てくる。一つは巻一善光寺の外塀の外を歩く法師の傘（大成二五ページ）。一つは、巻三の三輩九品道場へ向う三人の先頭の法師の傘（大成七十九ページ）。三つは、巻十二の一遍臨終の場へ歩む絵解法師に担われた傘の柄にある二本の巻物（大成三三〇ページ）などである。推察するに、寺社の縁日祭礼などの折に、絵解き大道芸で稼ぎながら、通常は全国を歩きまわっていた形同沙弥の類であろう（詳しくは『中近世放浪芸の系譜』二二八ページ・平12・岩田書院）。傘の下には、下駄が一足置かれていて、三人のうちの一人がいざりであることを示唆している。その下図の横に並ぶ四戸の囲いの左端では、嬰児が顔を覗かせる。売春を生活の手段とする女乞食には、生まれてしまった嬰児も少なくなかったろう。社会と生活の後進性、政治の貧しさが無言のうちに語られている。右端の雨よけの屋根を地べたに伏せたような三角小屋に、這い出している乞食が、中央を通る僧の方を見ている。自由を求めて、癩にも負けず僧の説法も聞かなかったが、立てなくなっての助けを求めているのかもしれない。

このような河川敷の乞食小屋を丹念に見ていくと、文献や記録には書き遺せなかった超最底辺の生活者の環境が、少しは理解できてくる。乞食の生活慣習や、その数などは、全く語られていないのだから、写実的なこの種の画証以外は凡ての暗闇なのである。今日と異なって、権力者の膨大な所得に比べての、一般民以下の人たちの貧しさは、今日とは比較に

ならぬ数百倍・数千分の一という隔差があった。今日でも後進国などに、この貧富の懸隔は大きく、むしろその差のひらきで、世界の国々の何番目ぐらいの遅れた国であるかを判定する材料にもされる。アフリカ・東南アジア・南米などの諸国の貧富の差は、そのまゝその国の後進性を示している。日本の十三～五世紀のころの社会はまさにその後進性を、これらの画証がよく表現してくれているのである。しかし、中世中末期ごろからの聚落地の発展は、三都のほかに地方中都市を産み始めて、急速にこれらの都市労働力を要求するようになる。都市という人口密集地は、これらの無職者を培う性格も具えていて、都市流入者である地方の放浪人たちの労働力を、巧みに需要とした。まさに人口の需要と供給のバランスは、都市という大きな聚落地の形成において巧みに保たれるようになってゆく。都市から排泄される膨大な塵芥や糞尿は、すべてこれら都市需要の労働力が、処理をしてくれるようになってゆく。水を利用するならば、河川の流れの修復や築堤工事の労働力も必要とされたし、大中都市に入ってくる膨大な生鮮食料の保存や運搬の労働力も、すべて都市流入の新しい都市人がこれを担わなければ、市場は動かなかった。これらの男手が多数利用されるようになると、彼らの食料もまた補われなければならないし、性の需要も求められる。販婦（ひさめ）などと地方から行商人として都市に出てくる女性たちは、その食と性との供給者として、新興都市へ流入して、定着してくる女性たちの次代の先駆者であったろう。地方の夙（しゅく）部落や河原の商人宿を起点として、海産物や野菜や鮮魚を、中小都市に分散して売り歩いた河川敷専住者たちは、当初は非人乞食と商業との一線を往反するすれすれの被差別人たちであったのである。大都市が発展する近世を迎える以前の日本の社会は、都市に形成されてくる商人、すなわち後に大富豪と化してゆく彼らの非人乞食とすれすれの、蔑視されつづけた階層であったことを、日本史は知っていない。日本歴史はそのあたりに一言も言及していない。

論題を再び『一遍聖絵』資料に戻すことにする。

（11）巻七……**桂川の一遍道場**の背後の生垣の外の**道路脇**

洛西にたどり着いた一遍は、桂の里の桂川べりに道場を開く。正面に田圃がひらけているが、その背後は粗末な農民の

家が散在する貧しい里の聚落となっている。その道場の裏の方の路傍に、道場の生垣越しのT字路を占拠して、道場に訪れる一遍信者を対象に施禄を乞おうと、乞食小屋が八、九戸、向きあって並んでいる（大成二〇一ページ……**図12**参照）。一遍の道場が設けられる以前の田舎道に、彼らが当初から居たわけはないはずで（通行人が少なければ、施禄は少ないはずだから…）、道場が開かれるというので、乞食たちはこの一隅を占拠したはずである。…とすれば、彼らは一遍一行の信奉者が集まるなら、自分たちへの同情や憐憫（れんびん）も厚く、施禄も多い、と踏んで、三々五々と集まってきた連中ということになる。一遍一行が斯くも非人乞食たちに慕われる、ということに、大きな理由がなければなるまい。一遍の全国をめぐる放浪姿と自分たちの服装が類似していたからか。性格が共通していたからか。

放浪の遊行聖と流浪する一般の非人乞食とは、一人々々を孤立してみれば、区別がつかぬほどに共通していたに違いない。罹病していない者ならば、それは修行できるか、怠け者かの差違ぐらいしかない。放浪する非人たちは、安易に修行僧にもなれたのである。流浪する遊行僧と、施禄にたよる非人の群れは、一遍や真教のような大者はともかく、下っ端の半僧半俗の輩は紙一重の差であった。真面目さに対する人生観の相違を以て、生きる道が岐れてしまう。桂の里の乞食には、白の面縛の非人が一人もいない。

図は、生垣外の往還に二列に向いあって八、九戸。生け垣側に五戸六人の乞食、向い側には街路樹で半分隠れているらしいが見えるのが三、四戸で三人のそれが確認される。向い側の六人は、右側からまず寝ている三人は一つ蓆に足を暖め

図12

あって逆様に臥しているから、夫婦ずれと子供の一つ家族のグループであろう。中央の男は、坐して拝むような格好で膝もとに行器を置いている。通過して行く小屋の左端の女性に憐れみを乞う姿の如く見える。さらに左に眼を転じての左端の二人も蓬髪で、通行人に施禄を求めて貰えない米銭にあきらめた風情。小屋が別だから夫婦ではあるまい。この生垣沿いの六人五戸に比べて、手前側の小屋の前では、坊主頭の男が通行人の女性に椀を持った手を差し出している。通りゆく女性二人は、逃げ腰のようである。その差し出した椀の腕の下に見える白頭巾は、恐らく乞食坊主の伴れの尼女ではあるまいか。その足許の隣の小屋には、同じように寝ている乞食の足もとと行器が見える。板束の仮小屋を支えているT字形の棒きれは、撞木のようにも見える。撞木をつっかえ棒にしているとすれば、せいぜい寝れる程度の低い三角小屋である。空也僧たち遊行する聖たちが持ち歩いた撞木だとすれば、古代の遊行聖の流れが中近世の鉦叩き、鉢叩きなどの半僧半俗の乞食坊主への贋僧全盛時代の中世初期の世相に適っている。『梁塵秘抄』三〇六歌の〈聖の好むもの、木の節…鹿角、鹿の皮、蓑笠……〉といった聖者が堕落してゆく直前の描写の今様から、乞食坊主の多くなってゆく十二、三世紀の風俗が、このような図の状態でも存在していたことが、想像される。

(12) 巻八……**美作一の宮の楼門**の脇

弘安八年（一二八五）に一遍は、京を通って丹波の穴生寺・久美浜から但馬を過ぎて、美作国にたどり着く。そして、一の宮の楼門の外で踊念仏を興行した。楼門内に請じ入れられた一遍の一行たちの殿舎の外の楼門の正面参詣路の通りを挟んで、向い側に板で設けた長屋のような粗末な木造の仮小屋、手前側に四戸の板と蓆だけを垂らした小屋が並んでいる（大成三一五ページ…**図13**）。背後の屋根しか見えない並びの、蓆の空き間に白頭巾を被る尼らしい女が、鍋を見ながら何か煮える食物を眺めている。向って右端には、半裸の男の後姿が覗く。この並びに対しての通行路を隔てた向い側の一棟の板屋根の六人の乞食は、三人ずつ分れてそれぞれ車座になって坐っている。左側の三人の一人は小屋の外の路傍に坐している。板屋づくりの長屋の小屋は、今までの社寺門前には見られなかったもので、一の宮の方で彼らを救済するために、簡単な

屋根付きの長屋式の小屋を設けたのかもしれない。六人のうち黒い蓬髪の乞食が三人で、あと三人は白髪のようにも見えるが、老いて動けなくなった罹病の老爺かもしれない。白い上衣を着しているのは、尼乞食で夫の傍に付き従っているものであろう。三人ずつの車座の真ん中に赤い底の見える行器が置かれている。行器は破れ傘などとともに、彼らの必需携帯物であったことがわかる。

ホカイ・ホカイビトとは、外居・乞食・乞児などの字があてられて、古くは物乞い人というよりも、家々をめぐって幸せをもたらす祝言者の意があった。年の代り目である正月などの祝言芸能をする門付芸の伝承者である。このことは、柳田国男（『先祖の話』・全集10）や折口信夫（『文字史ノート』Ⅰなど…）に指摘されてきた。彼らは、やがて寺社に保護され、隷属し、俗聖と混在しながら、賤民化する。近世に入っての、早春に穀の予祝として訪れてきた、鳥追い・猿曳き・春駒・代神楽などの正月祝言芸で稼ぐ人たちの群れは、このホカイビト曲芸

図13

師の流れで、近世大道芸として、四都の繁華街にも表われて日本芸能史の母胎を形成してくる。しかし、第二次大戦を挟んでの昭和三〇年（一九五五）ごろを境にして、ばったりと姿を消してしまった。恐らく、日本人の生活のレベルアップと所得増大の平均化が、これらの貧しい放浪門付芸を消滅させたのであろう。テレビ普及による視像文化の画一化によるところも大きい。

多くの伝承・伝統は一九五〇年代の十年間で、急速に消滅してしまったのも、この視像文化テレビの一律化である。日本人のものの嗜好や思想・趣味が画一化されてしまった。生活や文化の便宜性は、一方において古い伝承を消してゆく。二者は相拮抗し反比例する事象である。テレビに拠る文化史の変革は等閑にできない。

※

そして、次の絵が弘安九年（一二八六）になっての、北国を巡礼した後の、再び戻ってきた天王寺のほゞ全景が、金堂を中心に描かれる。しかし、常に多いホームレスの群れはいない。今日でも多い四天王寺周辺のホームレスたちは、釜ヶ崎の騒動事件などとともに、大阪市の社会的問題の種を胚胎したままに、今日に到っているが、（2）（3）（4）と描かれた彼らも、一人として描かれていない。私にとっては、霞が画面横に掃かれている四天王寺南大門から金堂にかけての構図は静寂静粛で、あの大衆的な雑踏とは奇妙なずれを感じてならない。

（13）巻八……大和の**当麻寺の曼荼羅堂**の庭

図14

四人のホームレスの首から上の半身が、堂の脇に設けられた堂を守る僧侶の住居らしい生垣の前にたむろしている。左から二人目の男が、着衣もなく蓆を腰に巻いて椀の食物をがつがつと口に運んでいる。向って右端の男は、仮小屋の屋根にするのであろう板束を抱えて、顔の表情は見えない。この二人の間にいる一人と左端の一人は、それぞれの男の伴れの尼乞食のようにも見える（大成二三〇ページ・**図14**）。

（14）巻八……**淀の上野の里**

渺茫と拡がる稲田の一隅に設けられた一遍の踊念仏の道場と、興行をしている一遍一行の踊る板屋。その裏側の道路脇に、二戸の非人小屋が並び、三人の乞食がいる。二人は向いあって話し、一人は肘枕でふて寝をしている。いかにも病みあがりらしく、けだるそうであり、あばら骨も見えて痩せている。肺病あがりの患いで重労働もできなくなった中年男であるまいか。二人の対座の左端の男の足許にまるい行器の曲り物が、蓋をあけて放り出されていて、対する男の方は椀の蓋を地べたに置いて、何かを食べている。彼の右足は奇妙なまがりかたをしていて、跛者が躄か…。何れかの不具者であることを図示している。この三人の他に、堂の方で設けたらしい少しまともな仮小屋が、その右側に並び、その中にも二人の放浪人らしい男が対座している。この二人は、半乞食の流浪人の接線上にある階層らしくまだ半裸になるほどには零落していないようである。男と女の夫婦伴れと見える。中央部の巾子（こじ）を高く造った黒い市女笠を被った方が女であって、箸と椀を持って、対座の男の口に食物を運んでやっているらしい様子である。男の方は白髪であるから、老人であるまいか…。老いて食扶持（くいぶち）を得る労働手段もないまゝに、放浪化するこの種の老夫婦も多かった中世貧困の社会である。そして、その余生も一年とはいわず、数ヶ月の短いものであったろう。（大成二三九ページ…**図15**）。

（15）巻十一……**志筑の天神社**の社頭の鳥居内部の両サイド

阿波国を出て、健康をそこねた一遍は、正応二年（一二八九）に淡路一の宮の大国魂社に参った後に、志筑の天神社に参詣する。その天神社々頭の鳥居の内側の境内の鳥居の両サイドに六戸もの乞食小屋が、板葺きの切妻屋根の拝殿に向きあ

うように並んでいる。天神社の方でも、清浄神聖であるべき鳥居内側の敷地に、不浄な彼らを置いていたということは、慈しみの精神からの黙認であったらしい

図15

図16

ことを考えさせてくれる（大成二九八ページ……図16）。

赤い鳥居の拝殿に向ってすぐ左側の鳥居の柱のもとには、白覆面の二人が桧破子（ひわりご）の行器を参詣客通路の方に二つ並べて、施禄を待つ。ぎりぎりまで参詣人の通り路にせせり出ての物乞いで、彼らの図々しさと、これを追い払わない寛容な天神社の神人（じにん）が推察される。今まで見てきた他の寺社に見られない雅量は、彼らが神社の清掃や糞尿残滓の始末などを請負っていた労働の需要供給の相関々係にあったことなどをも想像させてくれる。板柵屋根の乞食小屋のもっとも境内の内側に入った拝殿に向ってもっとも左側の片隅では、三人のホームレスが、鍋を鼎の上にすえて煮炊すらしている。破れ傘を拡げて、一般参詣人からは見えないように身を隠す所作をほどこしているとは云いながら、堂々と火煙のたつ炊事煮炊までも許していることは、神社側にも彼らから何かの利益を得るものがなければ、これほどの鷹揚さは示されないであろう。その鍋を囲む三人は、夫婦に子供伴れの三人家族とみえる。あばら骨の見える半裸の子供が、鍋の中を覗きこむようにして、空腹を訴え、老いた長髪の母らしい人物が「まだよ」と制止している気配である。

乞食たちの如き、寺社に寄生する日常生活とは異なる流浪層として、その接線上の紙一重ほど上のクラスとみえる時衆の遊行聖たちであるが、彼らの中の脱落者か、これから仲間入りをしようとしている男か…そんな種類の人が、本図の中に見えている。時衆層のたむろする拝殿の中の一行とは少し離れての、粗末な渡り屋の中で対座する二人の人物である。黒い端折傘を膝に抱えて笈を負ったまま坐している鉢巻白衣の蓬髪の山伏らしい遊行僧が、一遍一行の方に背を向けて、一人の時衆僧と何やら語りあっている（大成二九九ページ……図17）。この二人の中の白衣蓬髪の方の男は、ホームレスに落ちる一歩手前の中途半端な形同沙弥と、私はみる。同じ端折傘を傍の地べたに置いた時衆僧にしきりに、仲間に入って一緒に遊行の旅を続けようと、誘って入信をすすめているような姿にみえる。時衆僧となって、善意ある一般人たちの施禄を受けながら、食生活もどうにか満足できるほどの日々を送れるか、境内に寄生してホームレスとして気侭な毎日を過すか…そのような相違はこんな紙一重のわずかな隔差であったのであろう。自分の意志でどっちにでもなれた時代の、貧しくも

乞食の多かった社会の政治の無力不如意な時代が理解されるというものである。どちらの世界に同化しようとも、一般人ともども物理的に満ち足りることのできなかった貧微な中世社会であったのである。

（16）巻十一……**兵庫観音堂**の前

瀬戸内海を渡った一遍の一行は、正保二年（一二八九）八月二日に兵庫の観音堂に入る（大成三〇七ページ）。巻十一の観音堂で最後の説法をする一遍の姿とその一行と、これを聞く緇素の聴聞衆が溢れている（大成三一三ページ）。入母屋造りの観音堂と臨時に設けたらしい板屋の聴聞衆の建物とが向いあう外塀には、一面の溜池らしい池が拡がり、その外塀と池の片隅の道路端に、非人乞食の小屋が六戸ほど対いあってしつらえられている。

その六戸の乞食小屋からはずれた並びの池のほとりに、旅人らしい親子三人が、かたわらに笈を置いて休んでいる。笈には足駄が結ばれていて、長い旅路の末の休憩であることが察せられる。鉤っ鼻の白小袖に白団扇の男は、隣の母子の夫か、それとも兄か。腰にまるい筒がさげられているのは水筒であろう。すると、その前に坐っている鉢巻に藁帽子の男もその三人と一緒に旅をしてきた仲間であろう。白い護身用の刀のような棒も見える。旅のグループの一行が休憩をするのに、わざわざ乞食小屋の傍まで来て場を占める、というのも興味を惹く。彼らは故郷の田畑・財産を売り払っての、観音参り

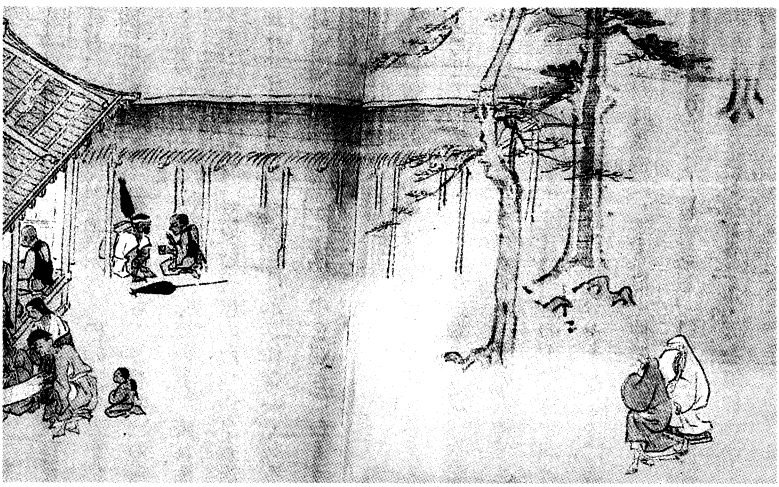

図17

であったのかもしれない。重税に耐えきれずに、故郷の実家を捨てて旅に出た習俗は、想像以上に多かったと思われる。彼ら定着地や発展しはじめた中世の聚落地（まだ何十万という都市は発生していない、聚落地といってもせいぜい千人単位の都市胎生地である）に労働の手段を得られなければ、これまた流浪人として非人ホームレス化してゆく階層にもなるわけである。

この旅人の一行の並びに池の傍に五人、道路のこちら側に六人ほどの乞食が群れている。行器（ほかい）や椀を膝もとの地べたに置いた姿といい、白い面縛をした三人の首だけ見える姿態といい、蓬髪で乱れた黒髪の無精面らしい姿といい、すべては今まで見てきた当代のホームレスの姿態に共通している（大成三一二～三ページ……図18）

三、むすび

以上に一遍上人の一代記を描いた絵巻の十六構図から、十八の場面のホームレスの図像を一覧してみた。施禄を貰える寺社の周辺には、当代の非人乞食が常にたむろして、善人の善意において食にありついていたことがわかる。これらは、記録文とか記載文書には全く記されない習俗である。図像の風態風姿風標などなどから物云わぬ無言の表情を読みとらなければなるまい。

貧しくも苛斂誅求に喘いでいた十三、四世紀の地方分治の封建制時代では、

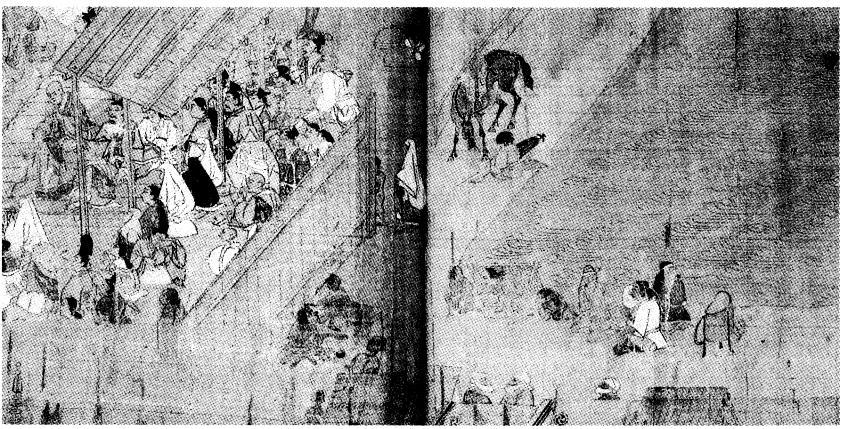

図18

餓死寸前の彼らの群れの人口比に対する割合は、今日の数十倍、いや数百倍の数にのぼっていたであろう。貧しい一般民を含めた社会の底辺層を顧みようとはしなかった幕政やその権力者、庶民の所得向上が施政者の所得に連なることに気付かなかった政治の時代、そしてそれを歴史の中に考えようとしなかった今日までの研究者たちに対して、ホームレス資料の図像の豊富な『一遍聖絵』から垣間覗いて、私は批判の一部としたかった。

※

同じように記録や記載の文芸では、それがドラマであれ、ビデオ映像であれ、如何にそれが発達しようと、語り伝えられる事実は、あくまで主筆者や主演出者の主観に左右され、凡てを伝えることは不可能である。五、六百年後の写真映像や記録映画やビデオが、どれほどの今日の風俗を確実に伝承伝存するか…。何百年後にか、激動の昭和（一九二〇～九〇）の頃の風俗を、画像や映写面に見て、それを考える研究も、存在してよいことである。

このように、人口五〇パーセントぐらいの割合を占めていたであろう中世被差別民の中の、一類のホームレスの生活を覗くことによって、文学とか記録の類に記されることのなかった風俗史・底辺の庶民史・社会下層民史の一片を垣間見ることができる。資料の少ない分野において、新しい歴史や文学その他の研究に多くの示唆を与えてくれる図像のみの文学は、他にも多い…と、考える。

図像文学という新しいジャンルの拡大発展を念じて、施政者や権力者のみの研究の現代の歴史を批判してみたかった。

次稿は『随身庭騎絵巻』を予定している。

（平成14・10・31稿了）

【付記】本稿は、平成十四年（二〇〇二）十二月七日の第六八回大妻女子大学国文学会総会において、発表した稿を基本としたものである。約一時間余の発表において、平安文学研究家の倉田実氏をはじめとして、多くの御質問や御示唆をいたゞいている。